

まだできていないですけど、今度、おひとりおひとり、ひとつひとつの家族に対する我が家の防災、家族防災スタートブックというのを今企画してまして。結局、一般論としてはこういうことやればいい、というのがわかるけど、我が家の場合何をやればいいんだ、という具体策について、あまり今まで触れられてこなかったのが、役所が出す文章が全員に役立つものというのは、結局誰にも役立たないということが、よくわたしがやっているよくある全員役立ちそうなものって、案外誰にも「水と食料」というだけで、食料は実際何がいいの？と。あとは薬があります、と、そこで止まっちゃうんですね。

そういった意味では、もう少し細かい情報を把握して今の段階ではそれに備えておくということと、友達をたくさん作っておいて、いざという時は、声を上げると助けるんですよ。それから、JDDネットみたいな組織がありますね。そういう全国組織と、少なくとも連絡先は覚えておいて、そういう連絡先にはこういう状況で困っていますと言って、そこにつながるという方法もあります。

結局、誰かが何かをしてくれる、ということは、非常に期待しにくい。自分が動かなければサポートは得られないというのが、災害時、特にそういう状況になりますので、自分がどこへどういうふうに動けばいいんだろう、ということを見ると被災を受けていないどこかの地域とか全国団体であったりとか、あるいは、大丈夫そうな友達だとか。そういうかたちで作っていくしかないのかな。

I:わたしたちの会もまさしくその全国組織に入っておりますので。

鍵屋:そうですね。

I:そういうネットワークで、わたしたち自身ができることもあるかと思うんですね。自分たちが助ける側になることもできると思います。

鍵屋:所沢の人に助けてもらうことがあると思います。板橋のほうが。

I:私たちにもできることがあるんですけど、なかなか市と協働できない。「わたしたちはこういうことができます」「こういう時にはこういう支援ができます」「こういうことが困っています」みたいな情報交換もしていきたいし、防災計画とかも入っていききたいな、と思っているんですけど、そこまではなかなかいかない。そのニーズすら市が把握していないというか、わかっただけないという状況にあるので。例えばそういう団体との協働とか、どういうふうにされていますか。

鍵屋:今うちでやろうと思っているのは、SOSファイルというものです。これ、真面目に書くと3時間ぐらいかかるらしいんです。これを、3時間かかると大変だから、30分バージョンで8枚くらいかな。そういうのを、この中から大事そうなを選んで、その勉強会と一緒に、障害の種別関係なくやっていきたい。特に、知的と発達障害の方は一緒にやってもらって、それで勉強会を、この間1回やりました。30分ぐらい。わたしがちょっと話をして、その後、皆さん自身でこれを備えましょうね、備えたものを自宅に置いて、それから子どものかばんの中に入れておいて、どこかであつたら、その個人情報を使って、薬の情報だとか誰に連絡すればいいのか、だとか、そういう情報が入っていますから、それを使いながら考えるようなレベルです。

そうやって一緒に勉強会をやって自助を高めていこうというのが、結局が一番助かるらしいんです。行政は、平常時に「やります」と言ったって、やれるかどうか、本当、わからないでしょう。本当にわからないです。やれるかどうか。一生懸命やりますよ、一生懸命やるけど、やらなきゃいけないことが普通の仕事の10倍ぐらいありますから。10倍ぐらいあって、普通の3倍ぐらいは働くんですが、その積み残しがどんどん、どんどん出ていくというのが、最初の3日間ぐらいの状況です。その3日間ぐらいの状況の時には、言われれば「はい、わかりました、はい、はい」と記録取りますが、実際にそこに支援物資届けるとか、お医者さんを運ぶとか、そういうことができるかどうかは、まったく運任せです。運任せというか、本当にわからないですね。そんなに。

ただ、自分でできるだけ手当てできるように用意しておいて、ものすごく仲のいいレベルで支援をお互いできるようにしておくというのが、結局が一番強いと思っています。ただし、それをやるためには、ある程度市から、市と本人とで「こういう時はこうしてください」という話を前もってやっておくことが有効だと思いますけど、本当に災害時に、市というレベルで、市自体も、他から応援を受けなければやっていけないと思いますので、そういう点では、ご自身のご家族、お仲間を守るためには、自分たちで備えを高めていくというのが、わたしは大事だと思います。

自分のところの障害者の方にもそう言っています。役所はやりますよ、真剣に。真剣にやるけど、結果として届かない可能性はものすごくあります。特に重度の方がいらっしやるとね。例えば、重度の知的障害者、最重度の方でも数百人いるわけですね。それから、要介護5の方だって3,000人ぐらいいるわけですね。高齢者で。その方々に対して、とにかく命が危険だ、まったく動けないというような方々がたくさんいらっしやる中で、どうしたって順番が遅くなるな、と思えば災害時はやっぱり、かなり厳しいですね。現実的な話ですよ。

司会：先ほどからご紹介あった SOS ファイルは、所沢市手をつなぐ親の会の会員さんから、3年ぐらい前にわたしも紹介いただきました。ホームページに載っていますよね。福岡県の製作者から許可をいただいて、PDFにして載せていただきました。

鍵屋：実際に作って保管をするというところまでいっているかどうかですね。情報提供で終わっている可能性が多いので。実際に作って保管をして、また見直すという、そういうサイクルに乗せていくか。それがあると。わたしが思ったのは、1割5分から2割の人は知っているんです。せいぜい20パーセント。80パーセントの方々は余裕がない。だから、例えばPTAの会だとか、何かの会の時に「30分だけ時間をください」といって、書けるところまで書く。書けるところまで書いて、あとちょっとというんだったら、「あとは家で書いてください」とかね。後で必ず学校に届けてください、とあって、ちょっと背中、ち

よっただけプレッシャーをかける。そういうやり方をするのがいいのかな。この具体的な方法論に関しては、あまり研究されていない。

司会：国リハの研究所では、そこをやりたいな、と思っています。特別支援学校もきつとご協力くださるだろうと思いますし、子どもや親御さんに、どういうふうに伝えればいいか、とか。通学路というのも怖いと思うんですけど。通学路で何かあったら、単独通学の方はどうしたらいいかとか。平時でも、電車が遅れた時とか、雪のときとか、不審者が出たときとか、いろんなことがあります。平時からの備えの学習を通じて、何かあったらどうすればいいか、ということ各自が家族も含めて考えられるようなプログラムができたらいいな、と思っています。それは、地域とか市とか協力して、これから作っていきたいと思っています。我々が何をお手伝いするのがいいのか、というのも教えていただきながら進めたいと思っています。

鍵屋：ある程度の参考資料があって、年に1回か2回ワークショップをやって、それで、参加するとうこういう成果物が持ち帰れて、それがあるといろいろ安心感が増えて、仲間もできました、というのは、わたしも今まで見た中では、そういうかたちはすごくいいな、と。

地域の中で、例えば地域と仲良くやるために、地域の中でワークショップとかマップ作りとかがあって、地域でマップ作りをやるから一緒にマップ作りをしましょう、と。それでそこに障害のある方からも見てもらえれば、障害のある方の目線で見ると、普段は大丈夫だと思ったのが、「こんなに危ないんだ」とよくわかった、ということがありますので、そういうマップ作りを地域と一緒にやるとか、そういう、道具をうまく使って、そういう機会をうまく作るということが。その部分が今までほとんど考えられていなかっただけな、という気がします。やっぱりワークショップが一番いいかなと思いますね。

司会：終了時間が迫ってまいりました。では、最後に、研究所で防災研究を開始した河村宏前障害福祉部長から、一言、お願いいたします。

河村：大変ありがとうございました。特に、今日の薄いほうの資料の7ページというところの、ちょっと、一番最後の資料ですけれども、「最終目標は、要援護者を災害時に要援護者にしないように、日常から訓練をする。その結果、要援護者を支援者に変えて。」というのが心に残りました。

鍵屋：説明をちょっとさぼりました。

河村：大変、これ共感しました。これをやる以外にすべはないというのは、や

はり今回のような大災害というのは、やはりこれならできただろう、ということで、わたくしどもも、これを目標に、実現していきたいと思いますので、これからも、どうぞ、よろしくご支援賜りたいと思います。

鍵屋：ありがとうございます。わたしが一番言いたいことを、言っていただきありがとうございます。こういうふうに言えば良かったんですね。「役割を与えて、この役割を果たすんだよ」と言ってあげると、とても頑張れるかな、と思います。「支えてもらいたい時は、『支えて』って言うんだよ」という。そういう人間らしい感情というものと沿って動くのがいいんだらうな、と思います。

やはり、人を助けるとすごく幸せですしね。つらい時に助けられると、やはり良かったと思いますから、支えて支えられてということを目指して。そのためには、支えるという部分の役割というもの、人にはそれぞれ役割がある、生まれてきた意味がある、というような、そういうところを災害時には発揮していただけるといいな、と思いました。ありがとうございます。

司会：どうもありがとうございました。まだまだ伺いたいことがたくさんあるかと思いますが、これからも、いろいろと教えていただきながら、進めていきたいと思っています。

鍵屋：わたくしも、ぜひ、皆さんと協力させていただきたいと思いますので、どうぞよろしくお願いいたします。

司会：よろしくお願いいたします。

皆：拍手

以上

第二回勉強会 概要（暫定版）

2012. 4. 26 北村弥生

参加者：34名

国リハ職員、親の会、当事者の会、ボランティア、市議など、お送りしたリストに加えて、自治会長6名、そのうち1地区は民生委員地区長より、民生委員全員に通知をお送りいただいたようで、民生委員7名がご参加くださいました。

5. 東日本大震災での障害者の被災状況と課題

★避難所・仮設住宅は使えないが、そのほかに公的支援を受けるルートがない

→ほかのルートを作れないか？

- ・仮設トイレは使えない
- ・異性の家族介助者では、避難所で入浴介助ができない→介助者が必要
- ・避難所で周囲に気兼ねする
- ・痰の吸引が必要な場合でも、入院できずに避難所で生活した
- ・仮設住宅で入浴できないため、家族は仮設住宅で、障害当事者は自宅で生活している事例がある
- ・家族だけで介助してきた事例で、支援者との接点がない
- ・被災地に患者会がなく、東京の患者会が支援した例もある
- ・避難所に行けないので、親戚を頼ったが、長期対応は困難
- ・障害者は入院、施設入所を勧められているが、機能低下と復興への乗り遅れがある
- ・福祉避難所の規定では、介助者：障害者比率は10：1であり非現実的（注：介助者ではなく相談員の比率）→現実的な、福祉避難所ガイドラインが必要

★手続きを短縮する優先措置がとれないか？

- ・仮設住宅のドアのちょうつがいをはずすのに、手続きが1週間かかった

★要援護者名簿を開示したのは南相馬市だけであった

- ・顔の見える関係、横の関係が必要（役所内外）

★福祉のDMATが必要（社協を含めボランティアは瓦礫撤去に集中した）

6. 東日本大震災等での好事例

- ・高齢者の安否確認を民間事業所に委託
- ・日ごろからの地域とのつながりづくり
- ・県からの人員派遣で安否確認を行った（10人/日）

7. GIS

- ・住宅地図をベースに情報を取り込む
- ・視覚的にわかりやすい形式
- ・アパートなどの記入に工夫が必要
- ・住民基本台帳とリンクできれば、更新は容易なのだが
- ・役所が契約している大手のシステムはメンテナンスはしているが、高価
- ・工事、固定資産税関係の情報を役所は充実させているが、障害関係の情報は明示されていない

8. 間仕切り

- ・女性の着替え、授乳、高齢者のオムツ交換のために、どこの避難所でも必要
- ・長期化した体育館では、1世帯ごとに間仕切りを設けた

9. タウンウォッチャー

- ・避難所まで行けるかどうかを平時に確認
- ・マンホールトイレ
- ・応急用の蛇口がついているマンホールもある
- ・被害想定訓練を消防、市、社協と協力して実施するとよい

6. 質疑

1) 吾妻地区の例

- ・平成17年に防災委員会を立ち上げ、月1回の活動
- ・町会長は、元消防長
- ・3000世帯中2250世帯は町内会に入会
- ・平成19年に、7地区の隣組単位で防災リーダーを設けた
- ・災害時確認カードを作成し、要援護者と支援者を募った

- ・市からは、要援護者名簿といっても住所、氏名、年齢、性別の情報しかこない
- ・支援できる内容を伝達したところ、要援護者に応募した半数が辞退し、登録は20名。障害があることを知られるのが嫌な人がいる
- ・平成23年には避難訓練に自衛隊も参加。毎年、避難訓練参加者は800人以上。
- ・平成23年には、防災マニュアルを作成
- ・避難所の運営は、まだ、見えてこない

2) 所沢市在住の車椅子利用者の個人の試み

- ・障害のある妻と2人暮らし、5階建ての1階に居住
- ・自助のために自治会活動に積極的に参加、日ごろの付き合い、清掃活動。期待はしていないが。
- ・要援護者には登録していない。市も、登録しても意味はない、と言った。
- ・2年前に市内で、災害に関するシンポジウムを行った
- ・最寄の避難所である小学校はバリアが多い、総合教育で講師として訪問することはある
- ・教育委員会に避難所に関する要望を出したところ、半年して、点検することになったが、年度が代わり、担当者が変わって動きが止まった
- ・市の防災会議のメンバーに障害者はいない。最近、女性が2名加わった。障害に関しては専門家が委員にいるとのことである。

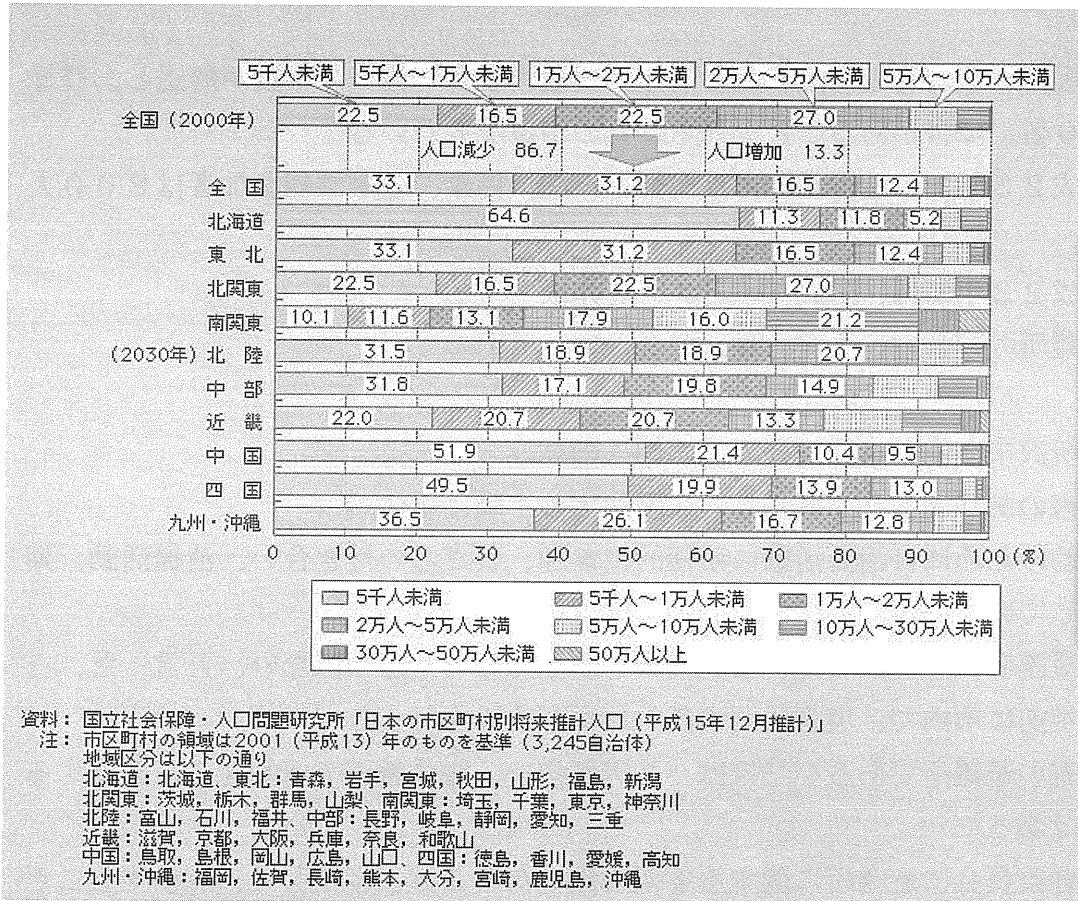
3) 障害者への支援方法（手引き方法など）がわからないので、市役所などで、講習会をしてほしい。（民生委員）

4) 地域にあった計画をどう立てたらよいか 要援護者が参加する避難訓練が必要

関連情報

1) 河村研究分担者からは、先週の国連のエキスパート会議で、「FEMAの障害担当委員から、米国では、障害と取り立てていわずに市民として対応するという原則ができつつあることが紹介された」という情報をいただきました。ケンタッキー州に要援護者が3割という都市があるそうで、視察のご提案をいた

できました。



2) モデル地域候補の規模

人口(人): 所沢市 34万、中野区 31万、三鷹市 18万、総社市 6.6万、浦河町 1.3万

人口密度(人/km²): 4,760、20,080、11,270、312、20

以上

「障害者の防災対策とまちづくりの総合的な推進のための研究」

第二回 勉強会 記録

この原稿は、「障害者の防災対策とまちづくりの総合的な推進のための研究」第二回勉強会における講師のご講演と参加者との質疑応答の録音をテープ起こししました。講演者と質問者に公表の可否を確認させていただきました。

平成 24 年 7 月 25 日

【開催趣旨】

国リハ研究所障害福祉研究部では、平成 15 年度より、障害者の災害時避難準備に関する研究を行ってきました。特に、支援が手薄な精神障害と自閉症に注目してまいりました。平成 23 年の東日本大震災では、北海道浦河べてるの家のメンバーが安全な避難行動を迅速にとり、日本自閉症協会が編纂した「防災ハンドブック」の有効性が広く知られるなど、これまでの研究と活動の成果が確認されたとともに、新たな課題も見出されています。

そこで、東日本大震災の被災地における障害者の状況をご紹介いただくと共に、車いす利用者が開発した「災害時要援護者支援（障害者、高齢者、幼児、妊婦、外国人を含む）のための地理情報システム（GIS:Geographical Information System）」についてデモンストレーションと自治体での活用例をご紹介いただき、今後の研究計画の作成と地域の関係者との意見交換を行うことを目的として勉強会を開催いたします。

【日時】平成 24 年 4 月 24 日（月曜日） 13 時から 15 時

【場所】国立障害者リハビリテーションセンター研究所第一研究棟 機材室
（2 階 エレベーター左）

【講師】水谷真、菅沼良平

（AJU 自立の家 わだちコンピュータハウス 防災企画 G L、名古屋）

「東日本大震災における障害者の状況と要援護者支援 GIS」

【連絡先】

北村弥生 Kitamura-yayoi@rehab.go.jp

Tel: 04-2995-3100 内線 2530, FAX: 04-2995-3132

国立障害者リハビリテーションセンター研究所 障害福祉研究部

〒359-8555 所沢市並木 4-1

司会：本日は、第二回勉強会にご参加いただき、ありがとうございます。合計 34 名の参加をいただいております。内訳は、国リハ職員、親の会、当事者の会、ボランティア、市議など、お送りしたリストに加えて、自治会長 6 名、そのうち 1 地区は民生委員地区長より、民生委

員全員に通知をお送りいただいたようで、民生委員7名がご参加くださいました。

要援護者の中には、高齢者、外国人、乳幼児、妊婦なども含まれるのですが、今回は、まず、障害に関わる方にお声をかけました。災害時要援護者支援に関係する人のうち、障害種別にかかわらず、知己のある方にお知らせした結果、知的障害、発達障害関係の方が多くお越しくださいました。これまでの私どもの研究が、「知的障害者、発達障害者への災害時準備」であったこともありますが、肢体不自由などの場合は物理的な参加が難しいという理由もありますので、本日の講演と質疑は録音し、テープ起こしして、参加できなかった人とも共有したいと考えています。

では、まずはじめに、AJUの水谷様より、東日本大震災での障害者の被災状況に関するご講演をいただきたいと思います。また、引き続き、菅沼様より、平時から地域の地図上で要援護者、支援者、危険場所などを記録し、避難訓練などに役立てるシステムのご紹介をお願いします。よろしく願いいたします。

東日本大震災 被災障害者支援・緊急情報

障害者は避難所に避難できない 災害時要援護者支援の課題



AJU 社会福祉法人AJU団体の家

AJU自立の家は

- 障害当事者運動の中から生まれた法人
- 障害者の自立を目指す事業所の総体
- 障害のせいや社会のせいにしておきらめるのではなく、社会に働きかけよう、そして自分たちが利用することでバリアをなくしていこうと約40年前から活動

東日本大震災では、大地震、津波、原発事故とどれをとっても日本が経験したことのない規模の被害をむたした。東日本の太平洋全域といっても過言ではない、沿岸400kmを越える莫大な被害。それは東北の街の光景を一変させた。

震災から1ヶ月、AJUの行った被災障害者支援の

障害者の死亡率2倍 2011/12/24 毎日新聞

東日本大震災の被害が最も大きかった東北3県の総人口自治体で、身体、知的、精神の発達障害を持つ者の割合は約7%に上り、住民全体の死亡率に比べ2倍以上高かったことが、毎日新聞の調べで分かった。多くの被災者は自宅と地域以外の場所において、振動が問題になったり津波を回避できず避難から逃げ遅れたとみられる。障害者が抱える災害時のリスクをどう減らすかが急務と見られている。

調査は10月、3県の総人口のうち被災者が多い35市町村を対象に実施。33市町村（岩手14、宮城10、福島10）が対象。仙台市と岩手県陸奥高田町は「調査地の死者数を把握できていない」としてデータの回答はなかった。33市町村の死者は計1万3619人で、全体に占める割合は約0.9%。身体、知的、精神の発達障害を持つ者の割合（計7万5668人）に限ると犠牲者は1568人で、死亡率は約2%に達していた。

調査で亡くなる者が特に多かったのは宮城県沿岸部。509人の障害者が亡くなった岩手県は7.4%だった。530人は身体障害者で、うち256人が肢体不自由だった。岩手県障害者と総人口割合をそれぞれ30人以上とった。市町村別調査は「施設入所者やサービスを受けたい人たちの死亡は、ほとんどなかった。自力で逃げ遅れたり、津波が来るのが分からず自宅などで逃げ遅れたケースが多かった可能性がある」と指摘する。

水谷：今日は、現在の災害時応援話者の支援がどうなっているかという現状と課題。それから、今後、どういった支援が必要かというところにつながる提言を含めて、少しご紹介しながら、地域防災の1つのツールとしてのGISの仕掛けについてもご紹介したいと思います。正面のプロジェクターでは「障害者は避難所に避難できない」、少しセンセーショナルなタイトルをつけさせていただいております。私共も、東日本大震災の翌日から支援に入った時に、まず感じたことをちょっと言葉にしたものです。

AJUが、約40年前から名古屋、愛知の地で、障害者も街に出ようと、1人の市民として活動しようということで産声をあげました。街づくりや自立生活、社会参加、就労、それから、防災の分野でも、特に、弱い立場に置かれた人のところに問題が端的にあらわれます。それを、専門家の視点ではなくて、「当事者がこんなふうに行なっているから、こうしたいんだ」という思いからスタートして、発想して、取り組んでまいりました。

東日本も発災翌日から、取り組んでいきます。そのあたりも振り返ってみたいと思います。前半の部分は、いつも使っている講演です。

「未曾有の被害」—先人の知恵を無視

津波てんでんこ		
1960年三陸沖 1933年神戶湾 1867年伊豆	2011 東日本大震災	1896 明治三陸地震
死亡	15,852人	21,953人
岩手県	4/4 4,670人	<< 18,158人
宮城県	3倍 9,511人	>> 3,452人
震災時の被災者数		
1973年阪神 1944年三陸 2011年東日本 2023年伊豆	2011 東日本大震災	1995 阪神淡路大震災
負傷者数	1/5 5,891人	<< 43,000人
住宅の全壊	127,197棟	104,906棟

「津波てんでんこ」という言い伝えがあるように、とにかく「自分の身は自分で守ろう、率先して避難しましょう」ということが伝承として伝わっている地域と、そうではなくて、1960年のチリ地震の時も、「こちら辺には足元しか来なかったから」と言って、石巻や南三陸の人たちは避難を躊躇されている。その差が、この差にあらわれているだろうと思います。

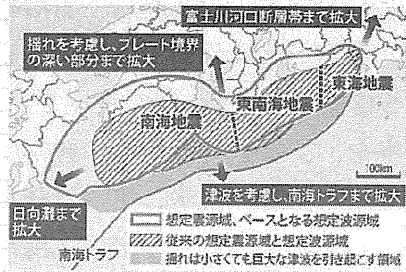
東日本大震災と阪神・淡路大震災の被害の比較

	東日本大震災	阪神・淡路大震災
死亡	15,852人	6,434人
行方不明	3,287人	3人
住宅の全壊	128,704棟	104,906棟
漁船	22,000隻	40隻
漁港	300以上	17
農地	23,600ha	213.6ha
被害額	16~25兆円	9.9兆円
震災時の国民総生産 計算と全国比率	20兆7,130億円 3.98%	20兆2,890億円 4.18%

河村宏先生も先ほどおっしゃいましたが、ええ、高齢者に死亡率が高いとか、障害者が死亡率2倍だという情報。それから、明治の三陸と比べると、岩手では4分の1に減ってるけど、宮城では3倍に増えてる。この差っていうのは、今後、災害を、支援を考える時、非常に大きなポイントだろうと思います。1つは防災意識の違い。岩手県の三陸地方、リアス式海岸のところはもう繰り返し津波被害が襲っている所で、

だから、建物被害、負傷者の数というのも、阪神淡路に比べると思ったほど多くない。負傷者に関しては少なかったんですが、この辺りは、我々、津波にばかり被害の大きさを感じておりますが、首都直下型地震も含めて、阪神淡路を思い出すと、倒壊よっつもう即死状態であったり、焼死というかたちで、延焼によって命を落とされる人が非常に多いということも忘れてはならないポイントとなっています。

南海トラフの新たな想定震源域と想定波源域



2011/12/27 内閣府検討会

- 南海トラフの震源域、2倍に拡大
- 西日本もM9想定

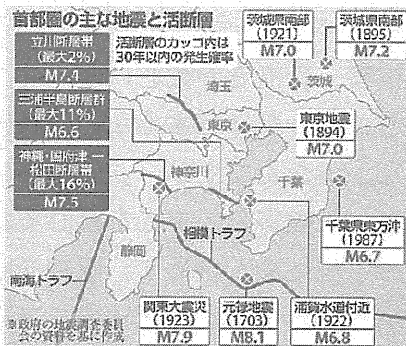
南海トラフの巨大地震が起ったら

- 日本の人口の1/3 ..東日本の10倍
- 工業出荷額1/2の被害 ..東日本は4%
- ガソリン生産高1/2の被害

↓
誰も救えない
障害者支援なんて言っていられない!?
健常者の中でも誰が生き残れるか、
生き残る人をいかに増やすかの課題。

18

首都直下型地震 M7クラス4年間で70%の確率



参考…関東大震災 1923/9/1午前11:58

- M7.9+7.2+7.3の3つ子地震
- 死者1053,85人、全壊109,713戸、半壊102,773戸、焼失212,353戸
- 人口250万人の東京市では130箇所以上から出火

19

ただまあ、最近の知見では中央防災会議や内閣府の被害想定の見直し会議でも、南海トラフによる巨大地震が、被害想定、非常に大きくなったということが最近のところでもあったと思いますし、直下型地震というの、最近、たくさん言われていることで、皆さんも意識を持っているところだと思います。

きっかけ

「女性の介助者が被災したので至急女性スタッフが欲しい」

発災直後の3月12日早朝

名取市（宮城県）の障害者支援センターより支援要請同日夕方

女性3名を含む5名のスタッフが、積もるだけの物資と燃料を積んで被災地に走った。

その後3ヶ月の間

8次にわたる36名（延べ350人）の支援隊を派遣し、救援物資と避難所間仕切りセット、障害者介助の専門スタッフを送り込んだ。

20

た。

私共が、今回の東日本、1年前に行動を起こしたきっかけは、名取市の障害者支援団体・ドリームゲートさんから「女性の介助者が被災したので女性スタッフをよこして欲しい」という1本の電話でした。名古屋の方は非常にゆっくりとした揺れで、感じなかった人もいたぐらいでした。でも、この被害の大きさに、とにかく大変だろうということで、当日から連絡を取り続けて、翌朝ようやく向こうから連絡が入りました。

第1陣の活動

3月12日(土)

- 早朝、名古屋市障害者支援センター「ドリーム・ゲート」より、女性スタッフ派遣の支援要請。
- 午後、入道に入り、出発準備。AJUの職員(水、津本良彦)、災害現場へ向かう。女性スタッフ3名、男性2名出発。

3月13日(日)

- 夜、ドリーム・ゲートに到着。女性2名は早速介護に入り、男性2名と女性1名は仙台にある自立生活センターを訪問、避難所を回りし情報収集。
- 深夜ドリーム・ゲートに帰り、男性は車の中で就寝。専ら女性2名は1時間睡眠のみ。

3月14日(月)

- ドリーム・ゲートでの活動、手伝い(女性利用者の介護、携帯電話の充電サービス、表現内容を改善する市民向け看板づくり)。
- 仙台市の障害者福祉「本部ありのまなま」にて避難所を回り、被災状況の報告を取り。
- 名古屋市内の福祉の担当者も聞き取り調査(被災利用者への避難状況)を行うが、障害者はほとんど見えてこない。

31

第1陣の活動

3月15日(火)

- ドリーム・ゲートの活動をサポート(介助、調理、清掃手伝い、携帯充電サービス)。
- 仙台市の障害者支援センター「C1したすけっと」にて、状況確認、情報収集。
- 福祉施設所を訪問し現状と今後の受け入れについて調査。
- ドリーム・ゲートの準備が整った。
- AJUへの仙台避難所への受け入れ要請を要請。

3月16日(水)

- 受け入れ要請を受けたKさんと入居先の見探りで、名古屋市へ避難を要請。
- C1したすけっとに、避難者のAJUでの受け入れ体制があることを伝える。
- スタッフの慣習がビーク。

3月17日(木)

- Kさんの通院に付き添い、その中でKさんの自宅に立ち寄り、当面必要な物資を積み、名古屋市へ向かう。翌18日、避難者Kさん宛てて第1陣報告。
- 女性スタッフ1名は残り、3ヶ月間の予定で途中、経費収支報告にあたる。

36

そこで、土曜日のうちに、積めるだけの物資、ガソリンと女性スタッフ3人を乗せて、日本海経由で被災地に入りました。最初の1週間、ドリームゲート、名取市を中心にして物資を届けたり、避難所の聞き取り調査を開始するんですが、障害者がほとんど見えてこない、どこに行ったんだろう？というのが最初の報告でした。

ボリオの地震直後で東京に滞在がある宮城築田町の小沢千吉さん(64)が18日、被災地で活動していた障害者施設「AJU」の自立の家(名古屋中津島地区)の福祉車に連れられる古屋へ避難した。名古屋は暖かい。あちらはものすごく寒かったから、とお話を聞かされた。

寝たきり障害者 助かった



宮城から名古屋へ18時間
宮城から名古屋へ18時間、寝たきりの障害者施設「AJU」の自立の家(名古屋中津島地区)の福祉車に連れられる古屋へ避難した。名古屋は暖かい。あちらはものすごく寒かったから、とお話を聞かされた。

AJU支援隊「身寄りない、感謝」

名古屋に避難した障害者施設「AJU」の職員(水、津本良彦)が、被災地へ向かう。女性スタッフ3名、男性2名出発。AJUでの受け入れ体制があることを伝える。スタッフの慣習がビーク。Kさんの通院に付き添い、その中でKさんの自宅に立ち寄り、当面必要な物資を積み、名古屋市へ向かう。翌18日、避難者Kさん宛てて第1陣報告。女性スタッフ1名は残り、3ヶ月間の予定で途中、経費収支報告にあたる。

中日新聞 2011年3月19日

約束通り、ドリームゲートさんでの支援を続ける中で、おひとり、Kさんという癌センターに当時入院されていた全身性の障害者に出会いました。彼が重傷者であふれた病院では居続けることができないということから行き先を探して。ヘルパーを使って生活するというのも、こういった状況ですからできないということで、名古屋に来ることを同意されて。4月18日に仙台に戻ったところなんです。ちょうど1年1ヶ月、名古屋で過ごしていたんです。こちらは、最初の1週間の様子ですね。

第2陣以降の支援活動概要

日 程	派遣スタッフ	活動内容等
第6陣 5月2~5日	6名 延24人	被災地福祉センターでの支援活動、C1したすけっと、ドリームゲートでの聞き取り調査(福祉センター) 福祉施設(中津島の福祉施設) 福祉施設へ入居、自費
第7陣 5月12~16日	2名 延10人	東出市、津山市の福祉施設を訪問 避難所三島市福祉センターへ入居の申し込み
第8陣 6月6~8日	2名 延6人	津山市福祉センター、千原川青年の家、津山市福祉センターへ入居して、被災者受け入れ支援活動
計	38名 延350人	1名は第1陣より3ヶ月、1名は2ヶ月間滞在して施設

33

この記事はKさんが、ちょうど1週間目に名古屋に避難したところなんです。Kさんは愛知県、名古屋の方の福祉を勉強されて、障害者が重度の障害があってもヘルパーやいろんな制度で機器を使いながら、自分らしく生きられるんだということ、改めて知られて、地元で頑張りたいということで先週仙台に戻ったところなんです。

第1陣スタッフ報告から

- **情報収集の困難さ**……どこに障害者がいるのかわからない、行政、避難所運営でも把握できていない。特に仙台市内には避難者自らの情報が届いてくれない。
- **物資配布の不均衡**……避難所内の物資、役所向にいた人だけに配られる。避難所以外の避難者には届いていない。必要な人に避難所内に必要な物資が届かない。毎月でも足りない物資が現状で、その量が不明で追加の物資も不足から確保しきれない。4、5月からは避難者と被災者の物資も届くが、現状でも不足が続いている。
- **障害のある人にとって避難所生活は極めて困難**
……津波で、住居を失ったのは被害。津波被害は避難所トイレットに多いが、避難所ではトイレが不足している。津波でトイレが壊れていて、排泄物処理が困難な状況。被災者自身がトイレを借りて、避難所トイレットに排泄物処理を行っている。Tシャツやトイレ用品は、避難所トイレットに不足している。Tシャツやトイレ用品は、避難所トイレットに不足している。
- **介助者の確保が困難**
……津波被害は、被災者の生活に大きな影響を与えている。津波被害は、被災者の生活に大きな影響を与えている。津波被害は、被災者の生活に大きな影響を与えている。津波被害は、被災者の生活に大きな影響を与えている。

31

第1陣の報告から見てきたところでは、情報収集が特に困難。どこに障害者がいるかわからない。行政の担当者に聞いても、避難所のリーダーに聞いてもわからない。「いや、ここには障害者、いませんよ」という横を調査員の前を知的障害の人が通り過ぎたり。そういったこともあって、一般の人には見た目ではわからない車いすや白杖をついた人は障害者とわかって、それ以外の方は非常に気づかれにくいという状況もあります。それから、物資がとにかくない。

ただ、あつても非常に不均衡な状況でありまして、避難所にいた人、配布の時にいた人だけに配られて、それ以外の人には配られない。取りに行っても配られない。特に、寝たきりのお年寄り用のオムツはあつても、中学生ぐらいの重度障害者が使うスーパージャンボという規格の物を求めても、そういった物は支援物資としてない。医療的ケアを必要としている人たちもカテーテルや滅菌精製水がなくて困っていらっしやる。非常に物資がないということが最初10日ぐらいでした。それから、避難所生活については、車いすの人だけではなく、特に障害のある人や移動困難を抱えたお年寄りも大変困難な状況です。特に、トイレというのは、逃げたその場から問題になります。ご存じのように仮設トイレというのは非常に狭くて、そこに、お年寄りが躓いて身動きがとれなくなる。あるいは、夜中に人をかき分けて行く中で、人の足を踏んじやったら最後、大きな声で怒鳴られて、怖くてもう次からトイレに行けないということはどこの避難所でも見られました。こういった避難所生活の困難、物理的なバリアというところが大きな課題でもあります。それから介助者の確保が困難というところが、最初の1週間の活動の中で

障害者支援「AJU」同行ルポ

……被災者の生活に大きな影響を与えている。被災者の生活に大きな影響を与えている。被災者の生活に大きな影響を与えている。被災者の生活に大きな影響を与えている。

……被災者の生活に大きな影響を与えている。被災者の生活に大きな影響を与えている。被災者の生活に大きな影響を与えている。被災者の生活に大きな影響を与えている。



嘆きの声消えず

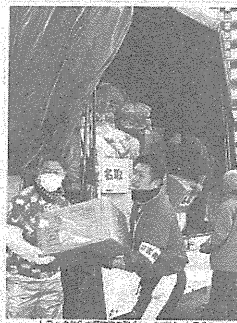
中日新聞 2011年3月23日

被災障害者に救援物資

AJU自主の災(株) 市民から食料や紙おむつ さいよび宮城へ出発

……被災者の生活に大きな影響を与えている。被災者の生活に大きな影響を与えている。被災者の生活に大きな影響を与えている。被災者の生活に大きな影響を与えている。

中日新聞 2011年3月21日



中日新聞 2011年3月24日

障害者へ「待望の物資」

……被災者の生活に大きな影響を与えている。被災者の生活に大きな影響を与えている。被災者の生活に大きな影響を与えている。被災者の生活に大きな影響を与えている。

……被災者の生活に大きな影響を与えている。被災者の生活に大きな影響を与えている。被災者の生活に大きな影響を与えている。被災者の生活に大きな影響を与えている。

34

見えてきました。

第2陣以降の支援活動概要

日 程	派遣スタッフ	活動内容等
第1陣 3月12日～19日	5名 延40人	避難所での活動、被災地からのセレクト品調達、被災地の障害者団体の後方支援
第2陣 3月21日～26日	10名 延60人	上記に加え、避難所間仕切りセットの納入、設置
第3陣 4月7日～9日	6名 延18人	第3陣は4月7日災害の大規模により被災へ避難、ミッション中断して帰る、第4陣につなぐ
第4陣 4月11日～16日	5名 延30人	
第5陣 4月16～19日	2名 延4人	ユニ提供の物資を被災地へ、避難所の復興本部、鳥田市の被災地へ

32

第2陣以降の支援活動概要

日 程	派遣スタッフ	活動内容等
第6陣 5月2～5日	6名 延24人	被災地での避難センターいわてでの活動、CPLをすてつと、ドリームゲートでの避難所、第三陣での避難所（中学校の体育館）間仕切りセットの納入、設置
第7陣 5月12～16日	2名 延10人	東松島市、栗田市の災害支援センター、第三陣の避難所へ間仕切り納入、設置
第8陣 5月26～28日	2名 延6人	秋田県南東市、平泉県雫川町の避難センターにのみくしを広く、被災物資受け入れ状況等調査
計	38名 延390人	1名は第1陣より3ヶ月、1名は2ヶ月長期滞在して帰る

33

避難所間仕切りセット納入実績

日付	納入場所	納入数	避難者数
3月23日	塩釜ガス拜啓所	10セット	120名
3月24日	栗田町市立小野小学校	20セット	70名
	栗田町市立小野市民センター	3セット	230名
	栗田町市 南浜南定林寺	3セット	200名
3月25日	共生園（知的障害者入居施設）	3セット	75名
	第2共生園（知的障害者施設）	3セット	100名
	東松島市立大由小学校	3セット	450名
	東松島市東本コミュニティーセンター	40セット	150名
	東松島市役所	15セット	-
4月8日	宮城県南松島合併両館	20セット	(1,000名)
4月8日	宮城県・気仙館合併両館	17セット	120名
4月13日	宮城県南松島合併両館	83セット	-
5月13日	宮城県南松島立南松島中学校	57セット	50名
5月16日	宮城県南松島市 4箇所	84セット	240名
	合 計	361セット	2,755名

34

第2陣以降、繰り返し、私共は、訪れまして、特に避難所のプライバシー空間がないことからくる問題を解決するために間仕切りセットを、菅沼を中心は何度か避難所の方に届させました。それから、物資も送りました。支援に同行してもらって届けたんですね。避難所の間仕切りに関しては、最初の3ヶ月で360セットを東北地方に届けさせていただきました。1週間後、見に行くと、知的の青年が居場所を見つけていたということもありました。それから、新学期が始まったところでは、長期化する避難生活に合わせて世帯ごとに区切るというかたちで使っていたこともあります。

避難所の間仕切り

女性着替え授乳楽に

障害者 オムツ交換に配慮

昭和区のAJUが設置
昭和区のアジュ(AJU)は、1000年の歴史ある昭和区で、障害者や高齢者が安心して暮らせるための施設です。昭和区のアジュは、障害者や高齢者が安心して暮らせるための施設です。昭和区のアジュは、障害者や高齢者が安心して暮らせるための施設です。

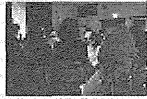


南三陸町立志津川中学校
(5月13日)

42

震災直後における支援を振り返って

- 壮絶な被災状況…余震や津波情報が繰り返し送られる中での壮絶な被災状況での活動（4月7日の余震で第3陣は避難、多賀城市）
- 長引く緊急期…電気、通信、ガソリン、水、ガス等のインフラ復旧の遅れ、被災者も支援者も混乱
- 特に移動と情報の制約は致命的
通信手段もマニュアルもなく、目の前の「この人」のために何ができるか一人ひとりが考えるしかない。判断力が結果を分ける。自分で判断するトレーニングができていたかどうか。
- 体力と気力…スタッフは昼夜を問わず働き、寒さに耐えながらの車中飯。本来なら長期にわたっての支援が必要だが、平安の中で生活していた者には、長期支援は極めて困難（こういう仕事を続ける自治体職員はもっと奇蹟）



発災直後の支援状況は、非常に今回、緊急期が長かった。特に、ガソリン不足、燃料不足。被災地の生活もですが、支援者の側も非常に動きにくい状況がありました。それから、どの大規模災害でも言えるんですが、移動と情報の制約ということが非常に致命的で、この問題をまず解決しないといけないだろうということを判断しました。特に、普段、我々は通信だとかマニュアルといったものに頼って仕事をしておりますけども、特にマニ

アルは流されていないことがあって、判断を仰ぐべき同僚や上司とも連絡がつかないという中では、目の前にいるこの人のために何ができるかということを一一人が判断するという、そういったことも求められてくる。判断力というのは結果を分けるということが見直されました。

障害者がいない状況の中で、出会った何人かの要援護者の状況を紹介します。車いすを使った83歳の女性。避難所にボランティアがいても、介護を受けることができない。基本的には家族でやるしかない。

60歳代夫婦

3日間自宅2階で孤立

- 夫は脳出血による左半身麻痺、車いす使用、左足に装具
- 自宅は亶理町。津波が来たとき、車で逃げようとしたが間に合わず自宅2階へ避難。2日間帯団にくるまり寒さをしのいだ。3日目に消防団に救助されたが、脱水症状気味のため宮城病院へ。回復後避難所へ。
- 夫は片麻痺があり、移動は車いすを使用。
- 自衛隊の風呂は底が深く大きく1人では入れず、担いで入れてもらうのも心配。地震があったから2週間まだ一度もお風呂に入れていない。
- AJIスタッフの発案で、バケツを借りて体育館内で足湯を流行。夫の足はむくみ、乾燥し、装具をつけた足はマジックテープの締め付けすぎによる内出血が見られた。足湯で汚れも落ち、すっきりした様子。避難者同士での足湯を提案。
- 奥さんや周りの人が積極的にやり方を覚えてくれた。（3/24山元町・坂元中学校）

60代の夫婦の場合は、亶理町で津波が来て、3日間、ご自宅の2階で毛布にくるまって寒さを凌いでいました。夫婦が移動した先でも、自衛隊のお風呂ができ始めても、身体にハンデのある人は1人では入れない。これは、知的障害の人でも結構あって、お母さんがいつも付き添って入れてらっしゃるところ、男女が別になっちゃったがために、1ヵ月入れない。長い人だと半年間、お風呂に入れられない生活を強いられております。

それから、14歳の当時中学2年生の女の子で、何度かNHKや新聞にも取り上げられたお子さんですが、医療的ケアを必要とする、我々が出会った中で最も重度の人が、石巻の湊小学校で、3階の相談室で避難生活を送っていました。私たちが訪ねた時は、まあ、とにかく物が無いところだったので、エンシュアとか、滅菌精製水とか、カテーテルとか、大きめの

14歳女性

避難所内で医療的ケアが必要

- 胃ろうによる経管栄養摂取
- 小学校の教室の隅で車いすに乗って避難所生活
- 主な介助者は母親（父親も無事）
- たん吸引などに使う道具を物資支給される飲料水で洗っていたので、名古屋から持ってきた滅菌精製水や経管栄養剤などを届けても量ばれた（3/23石巻市・湊小学校）



同書を調製してくれる
町内会の人たちの名にかけて
避難所でも購らしている



- 震災で自宅は半壊。
- 震災直後にヘリコプターで市内の病院に運ばれたが、重傷者であられ、「とても対応できない」と戻された。
- 教室の3分の1ほどの広さの相談室で23人が共同生活。
- 当初は毛布もなく、校舎のカーテンや運動会で使う大漁旗にくるまって寝さをしのいだが、周りの人がT子さんに多めに分けてくれた。
- 同じ部屋の住民は普段から付き合いのある町内会の人たち。陣営への理解もあり、深夜のたん吸引機の音にも嫌な顔をしなかった。
- 避難所生活の長期化を覚悟していたが、被災地に入っていた札幌市のNPOの支援を受け、3月29日には石巻市内の実家に。

紙オムツが喜ばれました。ご自宅が半壊と書いてありますが、実は全壊です。お父さんも直後、帰ってみえて、急いで避難所へ行こうということで逃げたんですが、ちょうど3階に上がったところに、津波に襲われ、校庭にあった車、ようやく車いすだけは取り出せたんですが、物資も全て流された状況で避難生活が始まりました。気管切開していて、痰の吸引に電源が必要なんです、予備の吸引器も含めて3日間もったそうですね。

とにかく電気がないことには命が繋げないということで、ヘリコプターによる搬送が始まった2日目からいろんなところにかけて、「何とか命を繋げてください」と、お母さんが声を上げたんです。地域の小学校に通ってらっしゃったので、学校の先生も一緒になって声を上げていただいたそうなんです、とても対応できない。石巻の赤十字病院にヘリで搬送されたんですけど、低体温症でもう命が危ないという人が非常に多い中、この方の場合には緑色のトリアージ・タグをつけて下ろされたんです。お母さんも「こんなはずでは」という中で、また、そこから仙台の医療ケアをしてもらった病院に交渉したり、いろんなところにかけてうんですが、こういった方でも、命を繋ぐという保証が今の状況の中ではないということです。

そんな一方で、地域の人たちとの関係もあったために、嫌な顔もされず、痰の吸引を夜中にやっても、付き合っただけたり、いろんな所から支援者が物資を持ってきていただけるということで、Xさんのところが一番重度で大変なんですけども、「いや、うちよりもっと在宅で逃げられない人がいるから、そっちに持って行ってください」と、いろんな所を紹介してその物資を届けて行っていたというような動きをされておりました。

被災者でありながら、支援をする側としてもお母さんが途中から動かれている。改めて今年2月にヒアリングをしたXさんから聞いてきたんですが、知的障害者の更生施設のひたかみ園という所は、非常に被害の大きな地域でしたけれど、浮島のようになって、そこだけが大丈夫でした。ずっと救援を待っていたところ、ヘリコプターが来て、ようやく助けてもらえると思ったら、何てことはない、行き場のない知的障害者が下ろされた。その知的障害の人たちは「あっち行け、こっち行け」とたらい回しにされた。病院も「うちは健康な人はいられませんから」と言って、ヘリコプターで運んだ先がひたかみ園だった。救援を待っていた入所施設が知的障害の人が押しつけられ他という話しですが、障がい者の側からすると居場所がない、駆け込み寺がないということです。

93歳女性 高齢化するも活動をし介護者の体力が限界

- Fさん、93歳、寝たきり。
- 居室の隅で、マットと毛布を敷いた上にFさんが寝ていた。話しかけても反応がない。
- 娘のKさんが13年間1人で母親の介護。Kさんは風邪で声がガラガラな上、腰を痛めていたが、2時間ごとの体位交換を1人でやっていた。
- 「足りないものはあるか」と尋ねるとデュオアクティブ（褥瘡治療に使用するもの）を切らしているが病院まで取りに行けないとのこと。この日右仙台市の妹の家までエアマットをKさん1人でとりに行った。
- 褥瘡の様子を見せてもらうと、仙骨部分に拳大の褥瘡あり、黒ずんでいて腫んでいた。パットには血が付着。おそらく表面を開いた褥瘡が見える状態まで進行している。CILたすけつとに連絡し、褥瘡用のテープを用意できるとわかった。

気仙沼市障害福祉課の職員 要援護者把握で苦労

- 市内には障害者が3000人いる。うち、知的障害が500人、精神障害も多数。身体障害のある方の中で、重症の障害の方の割合は多い。
- その方々の安否確認や、どこに避難所にいるかの把握はしていない。(3/27気仙沼市役所)



52

26歳女性 仙台・CILたすけつと事務局長

- Iさん、脳性まひ
- 震災当日、CILたすけつと事務所にて被災。
- たすけつとの利用者はそれぞれ自宅近くの指定避難所に向かった。震災直後に健常者スタッフが利用者宅を1軒1軒自転車でもわり、1箇所の避難所に向まると大変だと、籠寄りの避難所への避難を呼びかけた。
- Iさんの避難所＝長町小学校には、すでに1000人近くの住民が避難してきていて体育館は埋め尽くされていた。一度入ってしまうと動けない。方向転換すままならず、壁かにつぶつかると心配があった。
- 別の校舎にある障害者用トイレに行くため体育館から出ることもできないし、体育館内のトイレも大行列。余震も続いた。

- 日が暮れて寒くなった。当日は地震直後に雪が降った。「並の雪ではなくて、バケツをひっくり返したような大粒の雪」。それまでずっと晴れていたのに、「見たことのない雪」だった。いきなり寒くなった。
- 避難所にいるよりは事務所に戻った方がよいと判断。真つ暗な中を懐中電灯で照らしながら、何とか体育館から出た。事務所から迎えに来た車に乗って事務所に向かった。
- スタッフは他の避難所も回った。
- どれも一般の避難者が先に入り込んでいて、トイレは使

- 本震災日からCILたすけつとは被災者の訪問を開始。在宅障害者の安否確認と救援物資の届けた。
- 4月より、たすけつとを拠点として、「被災地障がい者センターみやぎ」の救援ボランティアが活動を展開。
- 女川町や石巻市の現場は、潮位を調べていかないと帰って来れなくなる。潮位を忘れていて、30cmつかりながら慌てて帰ってきた人がいる。「地盤沈下に加えて堤防が壊れて大変」。
- 津波で1階は流されても建物は建っていて2階に住み続けている人たちがいる。その中には障害者もいる。
- 現在も調査しているが、情報を掴むのが難しい。

それから、93歳の女性で褥瘡が非常にひどくなっている、本当ならもう、すぐに救急で雇らないといけないような状態の方だったそうなんです、周りの方に遠慮して、気を遣って、「もう少し様子を見ますから」ということで、最後まで病院に雇るところだったんですが、されなかった。この娘さんも、13年間おひとりで母親の介護をされていて、東北の地でなかなかサービスを使ってやるということが一般的でなくて、お

ひとりで抱えてらっしゃるところに、この震災の被害を受けて、より困難な状況になっているということも伝わってきています。

気仙沼の職員にやってもらった3千人の障害者がいることがわかっている、どこに誰が逃げているかが全くつかめていない。去年の3月ですが、残念ながら1年たった今もまだ、全体的なその、状況を把握できてきているのは、自治体では南相馬市のみです。127ある自治体の中で、市役所が把握できているのは1カ所のみという現状です。

ただ、まあ、そうですね、仙台で会った26歳の脳性麻痺のIさん、彼女がご自身が事務局長を務める障害者の自立生活センターのほうで被災をされて。全員が集まっているところで被災をされましたが、とにかく

全員、避難所に逃げようということで逃げたんですが、もうすでに1,000人を超える人たちがいて、何人もの車いすの人々が身動きもとれないし、一旦、トイレに行ったら、その後、戻ってくる場所もないというような状況。「これはここにいるよりは事務所に戻った方がいいだろう」ということで、全員、他の避難所に逃げた人たちも同じ判断で戻ってきました。こうやって、自主的に避難をせざるを得ない人たちが結構いたというのが、今回の東日本です。

あちこちに福祉避難所の指定を受けた場所はあったんですが、福祉避難所としての指導を受けていなかったために機能しなくて、自主的に福祉避難所機能を別

の施設が立ち上げたというのが非常に多かったというのが特徴。だけど、あらかじめ福祉避難所の指定を受けていないと、公的な支援が受けられないという状況です。

自宅を見に行ってもらおうと、時間帯が幸いしたのですが、もし自宅に1人でいたら、命が助からなかったかもしれないと話していました。彼女たちは2日目によく、テレビの画像を観て自分たちの身近でこんな大きな津波が起きていたということを知ったそうです。被災地では非常に情報がない中で、一体、何が起きているのかわからないところで、こうやって避難生活をまず始めなければならなかったということですね。先ほども話したように、ヘルパー自身が被災して自宅から来ることが難しいというのと、普段、自立生活をしている人たちだと、まあ、そのヘルパーの被災や動けないという状況からくる困難が覆いかぶさってきます。

全国の障害当事者団体による被災した障害者への支援

被災地障がい者センター日々の活動

- 被災した方（知的障害・重度身体障害）と日中一緒に過ごす
- 流失した就業支援センター（仮事務所）へ文房具提供
- 仮設住宅調査（スロープ設置・集会商務・障害者入居状況）
- 障害者関係団体への訪問によるニーズ調査
- 障害者関係団体・機関の連絡会、報告会への参加

など

65



全国の障害当事者団体も、こういった被災障害者の支援を直ちに始めております。先程のIさんたちも3日後から、在宅の障害者の聴き取り調査を始めておりますが、同じように大阪を拠点として、阪神淡路大震災を契機にできたゆめ風基金被災地の障害者センターが共同で、センターを立ち上げていた。私共がやったように、物資を届けたり、ボランティアを派遣したり、被災地を送迎のサービスをするという活動をする中で、いろんな在宅

や避難所調査を行なってまいりました。本部を中心にいくつかの拠点ができておりました。AJUも昨年の10月から、移動が困難になるこの雪の時期に必要なだろうということで、釜石に事務局を構えて活動しています。こういったところが、勉強しながら活動をしてきた状況です。

支援を届けるまでの長い道のり

- ・避難所を訪ねても障害者がほとんどいない
補正靴履に身を寄せる障害者には出会うものの、補正靴履にはほとんどいない。
- ・ライフラインが完全に止まった状況。多くの住民は避難所へ身を寄せ、水や食料等の物資の提供を受けるが、障害のある人は駆けつけの自宅や倉庫に篥えじっと耐えて、救援を待っていた。もしくは親戚の家へ身を寄せた。
- ・要援者への直接的支援をするはずが、支援を待つ人を捜すための調査が長く続いた。福祉サービス事業所、避難所の住居、民生委員、福祉学校の先生（OB情報として）を訪ねまわり、わずかな情報からたどり着いていく地道な作業。
- ・1人出会うと、あそこにも関わっている人がいるはずだと、また1人、また1人と、支援を待つ障害者に会っていった。
- ・支援ニーズの時系列の中での変化…当初は障害者団体を中心に不足する物資を届けていたため、次第に個人宅に替わり、物資だけでなく、入浴介助、買い物、見守り、通院支援、IT支援等の人的支援に。

う場合に、避難所に逃げられるというケースが多い。

事例（4月）

- ・障害児と母親が親戚宅に身を寄せたものの、長期化するにつれて親戚からもつらい言葉を浴びせられ、ノイローゼから入院
- ・避難所で1ヶ月以上も風呂には入れない
- ・精神障害者でありながら体育館での避難生活が長期化
- ・在宅障害者の中には、知的的人で、震災以来パニックになり、未だに自宅に戻れず車中生活の人がある（宮城）
- ・精神の人では、地震よりも作業所が再開できず日中活動の場を失った影響が大きい（宮城）
- ・停電中の地域でエアーマットを使えない障害者が見つかり、発電機を探しまくって届けた（宮城）
- ・20km圏内でいきなり自立生活せざるを得ず、他人介助を受けることに戸惑い（福島）

事例（4月）

- ・避難所でトイレが困難な人にポータブルトイレを導入。役所の決済を待っていたら1週間かかるため、たすけつとから急ぎよ商けた。内開き扉が引っかかるので「外開きに直したらよい」と提案。ちようつかいを直すのに決済が必要で、結局1週間かかった。行政のやることは、時間がかかりすぎ、必要な支援がその時その場で届かない（宮城）。
- ・義足を津波で流されて歩けなくなった人。それまでは自分で歩いて徘徊していたのができなくなった。被災した自宅の2階に住んでいて、今も横になっていいる。義足の申請をしているが2ヶ月先。比較的軽度な人でも、震災により困難が増した。

各地の被災地障がい者センターが共通に言うのは、障害者が見つからないという状況です。障害者が逃げるべく場所として、まず、皆さんが思いつくのは避難所だと思いますが、大体、判断出来る人は避難所行かないんですね。あんな過酷なところで自分は過ごせないとわかる人は行かない。だから、当初は親戚があれば親戚のお宅に身を寄せる。それから、それが難しければ、自宅での生活を続けるし、それも流されてしまっていないとい

当初は、親戚のところでも他の人よりもまだましな生活が送れた方も1ヵ月、2ヵ月とするうちにだんだん、状況が変わってきます。知的のお子さんをお持ちのお母さんと、親戚の方から障害のことを理解してもらえなくて、「しつけが悪い」とか、いろいろ言われるようになって、ノイローゼになり、お母さんは入院せざるを得ない。最初、大丈夫だった人の時間的経過の中で、困難が変わってくるというのが今回わかってきました。

それから、避難生活期の困難ということがいろいろ出てきました。例えば、ポータブルトイレが必要であろうと、高齢者がたくさん避難している所に届けたりしましたが、役所の決済を待っていたら1週間かかります。急遽「使ってください」と届けたものが、です。仮設住宅の内開きの扉を直すのに、蝶番を交換するということになり、それに結局、1週間かかってしまった。すぐに必要なことも時間がかかって、その場その場で必要な支援が行き届かないという状況もありました。

仮設住宅ができる時期からは、移送ニーズというのが非常に高くなってきております。現在も私共、支援を続けておりますが、6割以上が移送サービス。これは、生活圏から離れた場所に仮設住宅ができるということから、介護保険でカバーできる範囲を超えて移送ができないということから高齢者も含めて、非常に高いニーズがあります。

それから、障害の理解がなくて非常に困難を抱えていらっしゃるということもあります。仮